るやうに成り、全一體としての人間を忘却するに至るものである。經驗を詳細の點について實行せんとすれば、必ず主義者内に紛爭が起る。斯くて新黨新派が絶えず舊黨舊派から分かれて出る。人間の單なる理性だけでは、其れが一度び呼起した幽靈を取鎭めることが出來ない。全體の中の一個々々の案は、互に他の反對案よりも優ぐれて居ると考へて居るが、愈々建設的な事を考へて見る段になると、直ぐに新らしい反對意見が各自の内から起る。斯くて吾人は將來恐るべき混沌界に入らうとして居る。こんな事をして居ると、結局は誰か有力な人物の暴力によりて、時局の收拾をやつて貰はなくてはならぬ事に立至るであらう。さうなると、全人類の内面的統一、平和と愛の領域は何うなるであらう。社會化は確かに十分の問題を提起したが、之れを解決する力の無いのが缺點である。

六、經濟主義の批判

經濟主義については、全人類にとりての經濟生活の價値如何といふ問題がある。舊經濟制度の大變更は不可避の事に屬する。舊制度は「アリストテレース」の教義で大體極つたものであつて、吾人が既に進化の過程中に通り越したやうな社會組織と密接に關係せるものである。舊制度に生氣を與へたものは精神的の事柄に對する尊重の念であつた。然るに此念慮は奴隷制度の存在の結果であつた。物質的の事柄を顧慮することが第二位に措かれたのは、人類の大多數が隷屬的境遇にあつた爲である。奴隷が一たび解放されて獨立の勞働者と成つた時には、事態が甚だ違つた意味に解せられてくる。そして運動は上から下に及ぶの反對で、下から上に及ぶに至り、全然新らしい要求が發現してくる。經濟問題の擡頭の結果として、經濟的要因は重視せられ、團體生活の重力中心が一變せられざるを得ざるに至つた。經濟問題を輕視することは、最早理想主義的氣分の兆候ではなく成つた。

且つ舊制度は餘りに嚴格であつた。大なる改造を爲す事が餘り出來にくかつた。新制度は人間も事物も未決定の情態に置き、一切の制限的觀念に反對して無限進歩の觀念を提示しようとした。之れが爲に人間の自己意識は固くなり、人は各自の行爲に對し一層自覺を

有するに至つた。新なる資源は發見された。理論は先きに立つて指導した、新しい力は開發された。

要するに、技術的及び産業的の發達は經濟事業の性質を全く一變した。この發達が原因となつて戰慄すべき大問題が幾つも發生した。そして其れを現代及び將來が解決しなくてはならぬ事に成つた。吾人が此の方面に於いて如何なる決定を爲すかに拘はらず、其の決定は人類の運命を決定するであらう。故に今日の形勢は大なる緊張の形勢である。隨つて吾人は救濟を見出さんとする企てに於いて有らゆる力が集中されて居るのも、全く無理がないと思つて居る。然るに社會主義的理想は、精神的と物質的、即ち感覺的の物と感覺以上のものとを、共通の評價標準上に措かんと努めた。斯の如くして社會主義的理想は人生に一層の力と一層の連續性とを賦與せんことを希望した。

吾人は物質的と精神的との二つの間の關係に關して斯く考ふることが正當なりや否やを疑はざるを得ない。社會主義が經濟的の事をもつて單に目的に對する手段として取扱ふ如き事を拒絶し、經濟的の事にも亦獨立の價値があると言つて居るのは、全く正理である。經濟的の事は人生の全過程に影響するものである。新らしい能力も之れが爲に生じ、新なる刺戟、新なる目的も亦爲に生ずるものである。然し之れを認むればとて、物質的と精神的とを同等視するわけではない。吾人は自己の全生涯と全行動とを通じ、單なる存在と行動の世界との對立、隷屬的精神性と獨立の精神性との對立を感ずるものである。此の二つを同等視して好いか惡いかは最早問題にならぬ。一は指導すべきもの、他は從屬すべきものである。社會主義が其の經濟主義中にて獨立的なる精神性といふ如きものを一つも認めて居ない事、或は之を單に物質的のものゝ附屬物の如くに取扱つて居ることは、社會主義の缺點の一つである。故に社會主義者は如何なる場合にも物質的繁榮を第一位に置かなくては承知しない。其の結果、獨立の精神性を必要する如きものが其の標準を低下し、獨立の接觸が缺ける事になる。

此の自然主義的一元論の根本的誤謬は此處に存して居る。自然主義的一元論は心的生活

をもつて單に個々の心意に於ける一過程に止まるものと見做し、共同生活を通じての結合を一つも認めないのである。斯く此の一元論が其の注意を個人だけに限り乍らも、個人的生活は他と密接なる關係ありとか、動物生活と人間生活との境界すらも嚴密でないとか主張するのも、亦不當のことではないが、此の一元論は人間の場合にあつては心的生活が個々の分離せる諸點より成立せざること、及び心的生活は相集つて共同生活を爲すといふ意味深長なる事實を認めて居ない。此の共同生活には非常に豐富なる內容がある。且つ自然界の特性とは全く異つた特性がある。最嚴密なる人的意義に於いての歷史と社會とをして可能ならしむる所以のものは此の聯關である。之れ有ればこそ概念的の言語も文化も起り、此の文化が益々法律道德藝術科學等に分かれて行き易くなるのである。其の實此の土壤が無ければ、獨立の經濟生活は發生しないものである。何となれば、生存競爭に出かけて行かうとする單なる自然的衝動と、經濟的共同組織を造り出さうとする努力との間には、非常な逕庭がある。後者の主要觀念は精神的活動及び獨立的活動を豫想するものである。一單に自然的衝動がぶつつかつた丈けでは、經濟生活は出來上がらないものである。

自然主義的經濟主義は、唯物的自然主義と同じく自然的存在を主要の世界と見做して居るといふ缺點がある。而して又自然界の範圍にては通じ難いやうな思想能力を自然界の知的順應上に適用せんとする缺點がある。理論上の此の矛盾が原因となつて行動上の矛盾が起る。精神的の存在物は物質界について顧慮することを人生の主要目的と考へるわけに行かない。彼れの努力は何處かで自治的の目的及び價値の方に向けられなくてはならぬ。其の努力は自己充足的のものでなくてはならぬ。無限に物質的の物を蓄積したとて、人間は結局滿足するものではない。故に經濟生活ですらも、苟くも人間に幸福を將來し不幸を將來しないものとなるには、より高き生活の中に包含せられねばならぬ。外面的には人の願望は何等の制限をも有せないかも知れないが、主觀的には一定の制限がある。生活の手段についての顧慮は人生の實質となることが出來ない。

猛烈なる生存競爭より生ずる心配と紛糾とは、人間が精神的興味に充ち、又其心中に何

等重大なる道德的困難を有せざる時にのみ之れを耐へ忍ぶことが出來る。之れが第十八世紀の思想であつた。此の思想の結果として人生は何より角より、一般的叡智に依賴するものとなつた。而して其の洞察力と仁愛とからどんな事でも爲し得られるものと期待するに至つた。洞察力に就ては吾人は曩きに平均一般の人間の情態が不滿足なものである事につき、十分說いて置いた。然るに人間は道德上にも不滿足な情態にあることは疑ひがない。深遠なる思索家は皆なこの道德上の難問題を甚だ眞劍に研究した。哲學上から理性の優越權を熱心に論じた思索家、例へば「アリストテレース」や「ライプニッツ」の如き人々は、一たび人間の情態を思ふとき、激烈なる咎責の言を發せざるを得なかつたのである。時代を異にするに從つて此等の咎責の言も異なつては居るが、亦其中自から一致の點がある。

古代の思索家たちは鞏固なる判斷の標準と、人間の能力全部の調和ある發達と、活動の中にも心の長閑さがある事とを要求した。彼等は多數の群集が飽くことなき欲望に充ちて居て轉變常なき情態にあることを發見した。基督敎は慈善が人間生活を統制する力であると言明したが、此敎の主要の指導者等は皆な世に慈善の缺けたること、人々相互間の差異懸隔の大なること、利己心の破壞力を有する事を痛嘆した。近代は人の全くの能力を發揮させんとし、萬人をして生の進步に參與せしめんとするの大望を懷いたが、平均一般の人間は彼れを刺戟せんとする有らゆる企てに對し無力なる反抗を試みた。そして彼れを動かすには、人爲的なる手段によるの外に道が無つた。之れは此の大望ある近代も斟酌して考へねばならぬ事實であつた。如何なる思索家でも、道德的の任務に關し反省すればするほど、平均一般人が理想より遠ざかつて居ることを益々痛切に感ずるのであつた。之れは容易に證明の出來ることであつた。例へば信實と德操とを主張した「カント」の如きが然うであつた。

物質的條件を力說する經濟主義は此問題に關して何んと言ふであらうか。社會主義的原理に基づき經濟主義は全ての吾人の道德的現情に關する咎責を、社會的條件の悖戾と腐敗とに歸因せしめて居る。然るに自然は、洞察力と仁愛とを賦與されてあるといふが、其の

自然が何うして斯かる現情を生み出したのであらうか。若し現情がしかく不良であるならば、之れを造り出したものは甚だ良い者である筈がない。人間が生まれつき缺點あり又矛盾に充てる者であるならば、其の現情を一變するとも餘り大した益にもなるまい。人間は常に人的である。如何なる新組織も彼れをして其の本性の缺陷より脱せしめる事は出來ない。勿論組織の如何といふ事は關係する。人が健全な社會的環境中に在るか、又は不健全な社會的環境中に在るかは、結果に於いて大變な違ひである。然し乍ら內面と外面とは相共に作用しなくてはならぬ。精神的條件を決定するものは斷じて環境のみではない。基督教は逆境から生じたが、其れに負けないで反つて其れを征服(少なくも部分的には)した。

全ての文明には各その特有の困難があつた。歷史の跡を見ると、必ず一種の自己破壞の跡が見える。大きな浪が個人をも全種族をも襲ふが、人間は之れに屈服ばかりして居るものではない。各個性の分有する精神生活の獨創性が有る爲め、又獨立にして勝利的なる精神性の影響が有る爲め、個人は大浪におつかぶされても再び崛起し、自己の魂の奥に全ての環境と傳統とに打尅つ或ものを見出すことが出來る。吾人の現情は此の社會主義的經濟主義者の想像する如くに簡單でもなければ、又しかく制限されたものでもない。團體の生活ですらも、社會主義で言つて居るよりか遙に變化に富み且つ活動的である。團體には多くの「レベル」(水準)と潮流とがあつて、其れが新らしい衝動や刺戟を供給する。斯くて個性に影響を及ぼすのである。

要するに吾人の忘れてならぬ事は、經濟が第一の位置を占める事になると、變つた社會相が生ずるといふ事である。先づ資本主義が起る。これは恐るべき權能を有し飽くなきの貪慾を有するものである。其の反對の側には不滿足と羨望と嫉妬とが絶えず續く。而して之れが生の內面的進歩を阻害する。否な全然妨止する事すらある。大事なのは常に道德問題である。卽ち人間の魂の情態に關する問題である。基督教の歷史的地位について吾人は何んと批評するも勝手だが、一つ爰に忘る可からざる事がある。それは基督教が全人類の道德的刷新の問題を甚だ熱心に把柱し、四分五裂の時代に對し鞏固たる支持力と內面的調

和とを與へんことを志さしたといふ一點である。然るに社會主義的經濟主義は此の點を輕視する傾きがある。これ基督教から人間に來る所の建設的なる影響を尋常茶飯事と見做す爲である。然るに吾人は今日それが決して尋常茶飯事でないと言ふ苦がい悟りを得た。それには有力なる力と熱心なる努力とが必要であるといふ事を意識したのである。

經濟主義は獨り人間の內面的なる事業及び難問題を輕く見る傾きが有るのみならず、(前陳の如く) 其の幸福の理想が又餘りに皮相見的である。其の主要の目的は主觀的快樂である。快樂は必ずしも直接に感覺的でなければならぬ事もない。精神的の形式をも取り得ない事はない。然し何等か實際の內容の上に根抵し得るに非ざれば、快樂はやがて感覺的となり、又漠然たるものと成るのである。快樂が達せられし時と雖も、結局は人をして空虛と倦怠との感を懷かしむるに終るものである。快樂は吾人の滿たさねばならぬ大なる要求を人生に課し、吾人を推進する力ある衝動となる。此の衝動は、單なる個性を超越するところの衝動である。人間が宇宙的存在にして內面的生活の分有者なることは、此の衝動あるによりて證明される。

人間の活動中の主要の方面に關する吾人の態度は斯うなくてはならぬ。主要の方面とは勞働のことである、然るに此の勞働といふ語には多くの意味がある。此の語の使用が原因となつて非常な混亂を起した事があつた。吾人は物的又は經濟的生存の必要に驅られて吾人の取らざるを得ないやうな種類の勞作の事を思ひ浮かべ、それから他の一方では又自己の目的に對する吾人の內面的關係、之れに向はんとする完全なる心的傾向、及び吾人自身の生の領域內への其れの採擇の事を思ひ浮かべさへすれば好い。吾人は吾人に課せられた る作業と此の自分で擇んだ仕事とを明瞭に區別しなくてはならぬ。卽ち外部に向けられた仕事と內部に向けられた仕事との區別をしなくてはならぬ。前者にありては吾人は目的に對し無關心である。否な恐らく之れを憎惡するが、後者にありては目的物は吾人の內面的生活と共に發育する。前者にありては出來得る限り仕事を回避せんことを努めるが、後者にありては、反つて仕事を歡迎する。而して仕事は歡喜となる。而して目的との關係によ

り、如何なる他の快樂とも明らかに區別が出來る。人間の心に訴へるやうな、而して人間をして强制されたといふ感じから脱せしめるやうな仕事は、自由の仕事のみである。自由の仕事だけが人間の全生活を貫通することが出來る。

心理的生活それ自身の中に二つの段階がある。全べて眞正の仕事は目的を含む。そして心的の力を之れに結びつけて居る。然るに其の目的が單に多少吾人の興味を惹く力を有するに過ぎざるか、又は十分に吾人自身の生活中に採擇され得るものであるかは、非常な相違である。仕事が創造的となり、新らしい實在を生み出すのは後者の場合のみである。此の場合にのみ人生は其れ自身のうちに安住を見出し、同時に一層高き或ものに達することが出來るのである。仕事をすることゝ創造をする事とは、混亂せる又漠然たる物の集まりの中から選擇することの意味ではない。この二つは、包括的な全一體中の獨立せる要素である。之れが爲に人は各自の仕事を選ぶに當り全一體を自分の事と考へ、それより生じ來る生の向上を己れも分有することが出來るのである。幸福は個人々々の私事でなく、各人がそれから生を汲み出し得る所の大なる生の源泉であり、又各人が自己の所有と認め得る所の源泉である。餘りに强制的勞働が多くて、自由勞働が少ないと言ふのが、吾が現代の主要缺陷の一である。これ現代には眞の幸福が存せず、全一體としての實在に對する內面的接觸が一つも存せざる所以である。

現代が逢着せる大問題についての考察は以上で十分である、昔は割合に個人的要素の多かつたやうな仕事も、今は漸次この性質が無くなつた。之れは學知の方面及び技術の方面から自然力を使役するに至り、又工場制度が發達したことに原因するのである。斯くて仕事は尨大なる產業上の複雜なる組織を生じた、そして人的要素を左右するに至つた、其の結果として鴻大なる成績があがり、分業は益々複雜となつた。併し魂は依然として空虛であつて、魂の求むる希望の欲求は、終に滿たさるゝに至らなかつた。此の欲求を滿たし、人間の魂を强めるといふ事が、社會主義の大目的また主要任務であつた。然るにこの點に於いても社會主義は種々の問題を提起し得るが之れを解く力がないことを暴露して居る。

仕事の理想と幸福の理想とは依然として對立反目して居る。社會主義では魂といへば單に人間の能力のことである如く解して居る。之れでは不十分であるとは、吾人の先きに論じた所であつた。斯んな考へで行くと問題は益々紛糾してしまふ。然るに一方を見ると、勞働者は其の要求をもつて吾人に迫ることが益々切になつた。今人は勞働者の勢力を「デモン」の勢力の如くに恐れ、之れを振り捨てんことを欲すれども能はず、若し然かせば甚しく文明を損害（之れを亡ぼすことはないにしても）する事になる。

此の衝突は全人類の心を惑亂するものである。之れを艾除するの手段を百方講究せんことは、苟くも眞面目な、又思慮ある人々の全べて沈潛深慮すべき事柄である。之れが爲には社會的制度及び法規の必要がある。此の點に於いては他の場合に於けるより以上に賢明なる爲政家の資格が必要である。即ち物の本性を深く看破し、魂と仕事との間の隔てに橋を架するといふ最も思ひ切つた手段を採ることを恐がらないやうな心が必要である。然るに他の一方に於いて必要なることは、人間の性それ自身を深めることである。超人的の力が人生に持ち來たされなくてはならぬ。而して此の力を基礎として、吾人は精神的（獨り宗教的の改造のみならず）の改造をやつて見なくてはならぬ。物質的關心と適當の釣り合ひを取るには斯うするより外に道はない。

現代生活が二個の樞軸を有し、此の二個の樞軸にて廻轉しつゝある事は兎に角明々白々の事實である。一は精神的文化であり、他は經濟的文化である。前者は仕事と福利との對立を制尅するの力を有し、後者は自然と社會的關係との需要を滿足せしむるの力がある。今日の大問題は此等の二つの樞軸を調和せしめ、相互相提携せしめて相撞着する各見解を融和する事である。之れを爲すには精神的の力が指導の地位を占め、吾人の目的を全一體と結びつけねばならぬ。

要するに、之れは單に經濟的繁榮の問題ではなく、全一體としての人間の幸不幸の問題である。其の大眼目は個人の幸福ではなくて、內面的向上及び改造である。吾人は個人として、否な社會的單位として、一般に吾人自身の幸福を求めて居るが、反省一番すれば其

れは目的でなくて、吾人の本然の性質を一段高いところに向上せしめ、內面的に吾人を豐富ならしめんとするの手段に過ぎない事が分かるであらう。個人に於いて往々起る事が、全體にも當て箭まる、個人は自己の求むるものゝみならず、其れより大なる或ものを爲し遂げる事が往々ある。個人は幸福を求める。そして新生命と新生活とを見出す。「ゲーテー」の言ひし如く『キスの子「ソール」は父の驢馬を尋ねんとて出で往きしが、慮らずしも一王國を見出した』のである。

第五章

結論

吾人の之れまで考察し來つた各種の論點全部を一問題に歸攝することが出來る。曰、理想としての社會主義は人間の全生活を包攝し、之れに供給するに各種の必要なる目的及び權能を以てし、十分に人間の能力を發達せしめ、幸福の欲求を滿足させることが出來るか否か。之れである。

社會主義は人間を全ての非人的羈絆から解放し、經驗の土臺の上に立たしめる事によりて此の事を爲し遂げ得ると信じ且つ希望して居た。個人的の結合により、社會により、特に經濟的團結によりて、問題は十分解決が出來ると信じて居た。全ての他の諸問題は此點に湊合せられて居た。一切の他の事柄は之れによりて着色されて居た。全て人間としての

正當なる大望が遂げらるべき新天地が打ち建てられて居た。

吾人は全べて此等の問題に對し明白にして些の曖昧の點なき答解を與へなくてはならぬ。吾人は之れに對し否定の答を爲すものである。吾人の見地は政治家の見地でもなく。又は經濟學者の見地でもなくて、哲學者の見地である。若し社會主義者の理想が十分に實現せられたならば全體としての人間にとり、又人間の內面に於いて如何なる事が起るかを知るものは、獨り哲學者のみである。

吾人は六大項目に分かつて吾人の意見を陳べた。其各の場合に於いて吾人は社會主義は大問題を提起するけれども生の問題を解決する力がないと言ふことを發見した。社會主義の問題の取扱方は餘りに狹隘であり、餘りに概括的であり、餘りに黨派的である。社會主義は人の本性の深みと複雜さとを閑却し、其の實行は生の表面の一部にのみ影響を及ぼす力しか無い。吾人は此等の點を再說して見ようと思ふ。

一、社會主義は人生の全運動を包攝し、吾人の各種の努力を一層統一あるものとしようといふ。此の問題は必然起るべき問題である。然し之れに對して社會主義の與ふる解決法は狹い表面と特殊の「レベル」との以上に出でることがない。社會主義は甚深なる運動と、吾人の逢着せる各種の矛盾撞着とを看過して居る。

二、社會主義は人間をして一切努力の中心たらしめるが、人間の本性に關する其の考へは餘りに外面的である。社會主義は全一體としての實在から人間を引離して了つた。此の分離の爲めに人生には意義も價値もなくなつた。人生が實質あるものと成るのは、個人の生が全一體の生と結びつく爲である。

三、社會主義は人生をして全然目前的のものならしめんとする。然し生ける現在に達することをしない。人生は刹那に支配され、眞正の歷史を有せざるものと成る。

四、社會主義は完全なる平等を實現したいと言ふ。然し之れを實現するには社會の全構造を破壞しなくてはならぬのみならず、更に徹底的に之れを押し詰めて行けば、少しも精神性なき又は文化なき情態に墮して了ふの外はない。斯くて其の目的とする平等は不公正

となるの傾きが甚だ多い。

五、社會主義は、社會化によりて人と人とを一層密接に結び付け、人をして一層高尚なる事を爲さしめようとする。然し社會主義は一つも傳へる可き內面的の力を有せないから、全體が四分五裂して結局は個對全體の爭鬪に終る外はない。

六、社會主義は經濟的任務をもつて、何よりも大なる任務として取扱つて居る。然し經濟的任務を第一とせば、全一體としての人間の本性は大いに害せられ、且つ發育不良とならざるを得ない。特に人間の內面的生活はさうである。而して外面的が內面的を支配する事になる。

要するに、社會主義に於いては一つも人生の正當たる內容と本當の幸福とがない。色々の事が此の主義によりて實行せられたにも拘はらず、全局のことが表面にのみ限られて居る。而して行爲の唯一の指南車は功利である。社會主義によれば、優ぐれたる人智と感覺的衝動とが結合しさへせば完全な人間が出來上がる。斯くて知力主義と感覺主義とが相合して人生を支配し人生から其の魂を奪つて了ふ。社會主義の理論には、經濟的手段を過重視し、又道德的機能を過重視するの弊害がある。然るに經濟的手段は、自然と吾人の境遇條件とによりて供給せらるゝものである。社會主義は人間を生まれつき善且つ高尚なものと考へて居る。全人類が今日の如く不幸なる情態にあるのは、其の境遇條件の罪であると言ふのである。之れは「ルッソー」及び佛國革命の思想であつた。而して之れが亦社會主義の思想なのである。此の如く社會主義の思想と佛國革命の思想との符合せる必然の結果として、有力なる運動と激烈なる感情とを生み出した。然るに其の結果は內面的の墮落となつた。

社會主義には斯く反對理由と咎責とが有るに拘はらず、其の從來の成績については吾人も之れを認めなくてはならぬ。第一に社會主義は有力(且つ大部分は正當)なる批判を吾人の現情に對して下したのであつた。特に社會主義は、經濟問題を人生の重要なる一部分とし、其の結果が如何に意味深いものであるかを證明したのである。社會主義は人間社會の

一要素としての勞働者の獨立を認めた。之れが生の全體の上に有力なる影響を及ぼしたのであつた。社會主義にはすべて此等の貢献が有つたばかりでなく、一層多くの愛と統一と幸福とを實現し新らしい人生を鼓吹せんとする社會主義者も甚だ多いことである。苟くも社會主義を正當に理會せんと欲する人は、此の如き大望の力あることを一考しなくてはならぬ。然し此の大望を實現するには、社會主義が與へてくれる接觸よりも更に大なる接觸に之れを根柢せしめなくてはならぬ。若し社會主義の理想が更に大なる接觸より得られ得べき一切のものを犧牲とする事になれば、此主義が精神的に貧弱なものと成るのは免かれ難い結果であらう。之れを事實に徴するに、吾人の精神界全部は歴史的の仕事の中に浸されて居るものである。但だ其れが未だ世間に認められない丈けの事である。

社會主義――此語を最廣義に解して――が今や世界的勢力と成つて居ることは、日々又刻々に各國民の經驗する所である。少なくも間接に其の經驗しつゝある事である。何が故に社會主義は斯く勢力あるものと成つたかと言ふに、之れには二つの主もなる理由がある。而して此の二理由の合致が現在の危機の上に至大の結果を及ぼすのである。文明は現在は何等包括的また向上的なる目的を有せない。古代にありては宗教が文明に此の如き目的を賦與した。其次には知力的及び藝術的なる文化が之れを賦與した。次に實在論が努力を占め、其の影響をうけて人生が特殊の若干潮流に分割された。其の多くは些細の點に於いては有効であるだらうが、大體の結果は統一でなく分割である。

此の不安の時代に偶ま大なる經濟的發達が起つた。そして勞働は根本的に變形し、種々の衝突對立を藏する經濟問題が發生した。此の問題が目下全局を占めて居る。之れが爲に全人類は引きずられて其の軌道外に逸れた。而して人生は新らしい基礎の上に置かれようとして居る。經濟問題は今や其の目的を全體としての人間の目的とした。斯くて低くい目的が高い目的となつた爲め、正と邪とが混合され、互に相別つ可からざるに至つた。經濟問題も一定の點までは正しいが、全體としての人間に關する問題を押除けて了ふに至り、そして勞働者を全體としての人間の位置に据ゑ、特に手の勞働者を全體としての人間と誤

解するに至つては、正が邪となるのである。

之れが爲に人生の標準が餘りに狹隘なるものと成つた。人間の有する幅と自由とを取り留めんが爲には、吾人は此の狹隘に對し、極力防戰しなくてはならぬ。全人類は自己保存の爲に一大鬪爭をしなくてはならぬ。吾人は全體としての人間を果して理想とせねばならぬか、それとも又之れを犧牲とす可きであるか、全體としての人間は現情を同化する力があるか、又は現情が彼れを破壞するであらうか、――等の問題を決定しなくてはならぬ。社會主義の危險なるは其の精神的內容にあらずして人生の積極的なる目的の無き事である。其の精神的內容は勿論有限にして一方面的ではあるが、其れより危險なるは、包括的にして向上的なる理想の缺如せる事である。吾人今日のところ何等斯かる理想が無い。將來は是非とも其れが一つ無くてはならぬ。而して之れと同時に經濟的及び精神的の活動の相互關係を正當に調節しなくてはならぬ。卽ち人間そのものを勞働者より以上に置かねばならぬ。吾人は人生を十分に力强くし、且つ深めることなしには――換言すれば精神的改造なしには成功するものではない。個人的狂熱は吾人を救濟する力がない。吾人はより高い精神力の影響をうけなければ、吾人の性質中に大變化を起すことが出來ない。恐らく吾人は今や吾人に內的支持力と內的實質とを賦與する如き新らしい宗教時代に入りかけて居るものであらう。兎にも角にも大切なるは吾人の精神的自己保存である。幸福の伴ふ精神的自己保存である。人間は自己の精神的維持によりて自己は一切の政治的及び社會的問題よりも優越なるものであることを發見するであらう。一度び此の優越感が覺醒し來るときは、人間は最早之れを棄てることを欲しないものである。然り而して、人間が精神的に自由なる性質を有し來るときは、最早社會主義の强制には耐へられなく成るものである。然るに全體としての人間なるものが、結局勝利を得べき事の希望が吾人にある間にも、其れが達せられる前には未だ大きな鬪爭や革命があるかも知れない。目下のところでは未だ前途に希望の光りが餘り見えない。吾人は今漸く曲り角に達したばかりである。こゝが思案のしどころである。吾人は全力を盡して何れの方向を取るかを決定しなくてはならぬ。

從來勢力と價値との二つは大分變遷があつた。一大運動は既に發生して居る。而して個人は素より全國民の感情も深く動搖して居る。然るに今日の世には釣り合ひを與へてくれるやうな包括的にして向上的なる力が無い。吾人の生活には、吾人の精力を指導すべき實質が無い。重大なる變化が今にも全體としての人間を襲はうとして居る。千年の古るい昔から傳はつた社會の內容は、今や崩壞して、徒らに雨露に委せられて居る。昔は上から下へと進んで行つた運動があつたが、今は下から上へと行く運動が起つて居る。其の結果として大變化が起つた。全體の形勢に對する人間の位置が一變した。人間は今や自己について、又自己の實在に對する根本的關係について、不安になりかけて居る。宗教的生活は素よりだが、道德的生活を送る者も亦足元がひよろついて居る。

この點に於いて吾人の時代は悲劇的な光景を呈して居る。現代人は自己を一切の紛糾錯雜から脫せしめようとし、自己の能力に依賴しようとして居る。彼れは普通一般の存在といふ「レベル」の上で自己の諸機能を十分に發達させる事により、又一層密接なる團結を爲す事によりて何事でも爲し得ざることなしと考へたものであつた。斯くて彼れは狂熱的努力をもつて天ほど高い塔を築き上げんことを求めた。(註——これは「ベベル」の塔の故事によるもの乎)既に各種の國民は混亂情態を呈して居る。いくら統一や平等を喋々しても、人間は益々相疎隔して行く一方である。吾人は明らかに人類の缺陷が見えた。人類の爲めにといふ熱心は今や下火になりかけた。夫れ果して吾人の社會的秩序及び文明が、內面的の統一を生じ必要なる精神力を生み出し、個人並に全人類の心的隔離の防止策を講ずる丈けに有力であるかないかを早晩決定しなくてはならぬ。然らざれば吾人の社會秩序と文明も亡びなくてはならぬ。又亡びるのが當然である。精神的世界それ自らは頗る安全である。そして一切の變化と人界の狂熱とを超越せること、恰も星が地よりも遙かに高く輝くが如くである。人類は獨立的なる精神性の存在を亂暴にも否定し去り、又一切眼に見える接觸を破壞し去つた後でなければ、精神性の如何に必要なるかを自覺しないと言ふ如き事が、或は無いでない。そんな事にならぬうちに、吾人各自は宜しく忠實に各自の本務を盡

くし、全體の形勢をしつかり眼中に措かなくてはならぬ。

附錄

現代人は何故に宗教に立還りつゝあるか。

本文は十有餘年前「エナ」大學オイッケン博士より譯者に贈與せられた一小册子の全譯である。

今日人生の運動は全然宗教に反對であるとか、宗教否定のみにしか時代精神は籠つて居ないとか考へる人があつたら、其人は皮相見的な時代觀察者に過ぎない。

成るほど現に其の否定の聲が囂々として公衆の耳朶を襲つて居る事と、其聲が漸次群集を貫きつゝあることとは、確かな事實ではあるが、學者等の研究について見ても、將た人間の魂の深みに就いて見ても、實は然うでない事が分かる。即ち此の兩方面を見るに、宗教は必要不可缺であるとの感、即ち宗教渇望の念の益々強く起りつゝあるのが認められる。尤も其の謂ふところの宗教なるものは往々にして明瞭を缺く事があり、又傳統的なる宗教とは甚しく異なつて居る事も往々あるが、人生をもつと深みの有るものにしたいとか、吾人の可見的存在に於けるよりも更に深い内面的關係を造りたいとかいふ要求の起つて居ることは疑ふ可からざる事實である。今日の精神生活に於いては、分子的變形が起りかけて居る。之れは最初には目立たないが、漸次增加し、終には突如として眼前に現はれ、又必然的に生の全條件に根本的變化を起すに至るものである。

今日のところ未だ此の運動は暗流に過ぎない。隨つて表面には反對の方向に流れる潮流が見える。然るに此の暗流が段々表面に上つて來つゝある。其の兆候が種々に表はれて居る。それが皆な虚僞の兆候であるならば格別、然らざる限り此の暗流はやがて全體の運動を左右するものと成るであらう。

此の傾向を説明すべき最基本的なる理由は、一言にて之れを示すことが出來る。即ち之れは現代文明に對する不滿足が增加せし爲、又は少なくも今日人生の表面を占め居る如き文明の諸方面に對する不滿足の感が增加せし爲である。文明の外面的成功は如何に燦爛たるも、各自に内面的必要を有する全人を滿足せしめ能はざる事、又文明によりて吾人の周圍の世界が改善されたに拘はらず、文明が可見世界にのみ人間の努力を過度に集中し、人生を現世化せし爲に、内面的に空虚が生じた損害は償ふことが出來ないといふ事——この二つの事實を蔽ひ隱くす事は出來ない。

吾人現代人は全力をこめて仕事に着手した。そして技能上完全の域に達し、個々の成績

を集大成して大なる系統を造り上げた。吾人は勞作の能率の增加により益々世界を征服した。之れと同時に今までより遙かに合理的な形式を人間社會に賦與した。然るに吾人は人生の手段及び條件に對し有らゆる注意と努力とを拂つたと同時に、一方では人間そのものを失つて了ふ如き危險を冒した。そして外面的には驚嘆すべき成業があつたに拘はらず、內面的には益々小さく〳〵成つて了つた。吾人の仕事は吾人の魂とは別々のものに成つた。そして今では壓服的に魂の上に反應を及ぼし、全然魂を吸收し去らんとするの概がある。斯くて吾人自身の作つたものが却つて吾人の主人となり壓制者となつた。且つ分業の增加するに伴ひ、仕事は漸次專門化し、各個人の魂の中の小さい部分から更に小さい部分へと進んで行く。そして全人が働らく機會は益々少なくなり、吾人は吾人の本性に優越せる統一が無くなつて了ふ。斯くて吾人は段々に文明機械の一部に過ぎざるものと成つた。

斯くて刻々に起りつゝある危險も、宗教が、又理想によりて統制せらるゝ文化が、人の心の眼前に人生に關する他の概念を掲げ出して居た間は、未だしかく重大なる脅威だとも感ぜられなかつたのであるが、今やこの宗教も文化も力の弱いものになつて壓迫を蒙るに及んでは、可見世界に向つて進む此の傾向を遏ぎる力が段々無くなつて來たのである。然るに此の俗化の結果として、如何なる損害を蒙りつゝあるかと言ふことが、少なくも明瞭に認められ、又痛切に感ぜられて來たことは明瞭である。斯くて勝利そのものが反つて反對運動を喚起するの原因となり、外面的の征服は却つて人間の力の無限ならざることを明明地に知らしめ、外面的勝利が內面的敗北と化しつゝある。精神的生活の爲に一度び獲得し與へたる獨立は、一時は雲に掩はるゝかも知れないが、永久に破壞せらるゝものではない。之れと同時に、人生にはもつと魂と深みとが必要であるとの要求が、力强く表はれつつある他の一面には、若し全が魂のないものと成り新らしい精神世界が一つも吾人の眼前に開かれないならば、吾人人類は一つも魂を有する事が出來なくなる——といふ事が漸次明らかに成りかけて居る。その結果として吾人は再び宗教の深みに追ひ入れられた。蓋し宗教なくんば人生は所要の深みを見出し得ないからである。

此の如く魂を要求するの念は、連續性と永久性とを希望するの念慮によりて伴はれた。

現代人は時代の潮流に飛び込み、現世の諸條件を向上し、此世からして其の全ての力を引き出して見ようとする一念に驅られて、側き目もふらず驀進した餘り、常住永劫の側面から人生と世界とを考へて見ようとする宗教的の見方を棄てゝ了ひ、永久性は色彩なく又た空虛なものと化して了つた。斯の如き現代人の企てに於いては、發達といふ觀念が特別に重視せられた。現代人は神であれ運命であれ、何か高い力があつて、其れが人間の此世に於ける位置を決め、之れを固定したものにするといふ如き考へを起さず、人生は依然として流轉常なきものであると考へ、人生の條件は無限に改善の餘地があると考へ、現在に何程の未熟と損失とが有らうとも、將來は段々よくなるといふ堅い希望を懷くに至つた。斯かる確信は人をして其の努力を全然生きた現在のみに限らしめ、現在の進化段階に對し人間の努力を調節せしめんことに意を用ひしめた。之れは人生に新鮮潑溂の氣分と移動性とを大いに賦與したものであつた。全ての强直は排斥せられた。全ての莊重は流動的となつた。無限增加は夥多なる諸形式を倍加した。

こんな事は少しも攻擊又は擯斥をしないでも、人々個々の生活經驗に徵し、此の如き傾向の危險にして缺陷あることが益々明らかになる。時代の傾向に從ふことは、最初は明らかに利益のやうに見えた。何となれば堅い確信の一群が依然として自己を維持して居り、諸運動に對し平衡化の力ある靜止を與へたからである。然るに諸運動は漸次此等の一群の殘存者をも味方に引き入れ、全人生に對し支配權を揮ふことが益々專らとなるに至つた。斯くて此の運動は絕えず益々急速となり、愈々慌て彌々騷がしいものに成つた。變化は益々頻繁に起つた。刹那と刹那とは目白押しになつた。而して現在といふものが、經過的なる一刻のことに外ならざるに至つた。然るに斯く遞二無二前進するばかりでは、少しも本當の人生味がないといふ事が、其の中に明白となつて來た。且又、吾人にして若し今日眞であり、善であり、美であるとして尊崇せらるゝものが、必ず變化をうけて明日は不安定なものに成るかも知れず、今日『現代的』と稱せらるゝものが明日は陳腐として棄てらるゝ

かも知れないといふ事を信ぜしめらるゝに至るときは、全ての勇氣は直ちに消滅して了ふ外はない。無反省にて單に刹那に生きる如き人なれば、其の刹那をば全體の絶頂だなどゝ眞面目に考へるかも知れないが、今少し先きの見える人ならば、左の如き事を信じないわけに行かない。即ち吾人は吾人より先きに行つた人より少しも樂ではないであらう。印度の敎によれば死者の魂は生者に向つて『吾々は今の汝等の通りであつた。汝等は今の吾等の如くなるであらう』と呼ぶさうだが、此の諺は今も當つて居る――と斯う信じないわけに行かぬ。要するに、人生が若し果して連續せる刹那といふ細糸で續まれたものであつて其の刹那は互に目白押しをして居るとせば、又その結果、刹那が消滅する毎に、全ての行動は直ちに元との虛無の深淵に沈み行くものとせば、如何に刹那の興奮的の活動を爲さうとも、人生は單なる影法師に過ぎぬものと成つて了ふであらう。

それとも吾人には吾人の之れほどの苦心と心配と焦躁とが人生全體の進歩の爲になりつつあるとかいふ確信でも有ればのことであるが、其れが又吾人にない。成るほど吾人は、絶えず精密科學の方面に於いては進歩しつゝある。例へば吾人の環境を技術の方面から支配しつゝある如きである。吾人は地水火風を人間の爲に頤使して居る。吾人は吾人の生存から苦痛を除き、快樂をもつて生存を滿たさんとして居る。然るに吾人は一體こんな事にて實在の深みとの接觸を一層密接ならしめつゝあるのであらうか。吾人は果して倫理的感情に於ける如くに精神力に於いても發育しつゝあるのであるか、吾人は果してより偉大にして高尚なる人となりつゝあるのか。人生に快樂が增加すると正比例にて、吾人の內面的滿足及び眞正の幸福は增加するものであらうか。其の實吾人の發達しつゝあるのは、吾人の存在の本質に於いてではなく、外界との關係に於いてである。故に、現代文明の言語道斷なる勞苦は果して働らき甲斐ある勞苦なるかの問題を回避するわけに行かない。吾人は働らき又働らき働らいて底止する所を知らない。蓋し吾人は永久性を棄てたが爲に、時代の有らゆる內面的結束を失ひ、包括的なる見解の有する全ての力を失つたからである。斯くて吾人は指導の星なく漫に時間の波浪の上に泛々として漂つて居るのである。

此事が各人に明瞭に意識され又個人々々の經驗する事實となるや否や、生存せんとする勇氣は全部瓦解するであらう。然うなり度くないと思へば、吾人は刹那々々に動かされず、よく之れと戰ひ、永存的なる目的の爲に働らく事を得せしむる如き耐久的なもの又永久的なものを、何にか吾人の支配領域内に發見し、又これを復興する事を計からねばならぬ。然らざれば吾人の人生には何等の意義も價値も無くなるであらう。斯かる永久性に對する希求、又單なる運動に對し、優越の位置を占めんとするの願ひが、現代に貫通せる事は、多くの兆候によりて暴露せられて居る。然るに斯かる希求は永久性眞理を代表する主要のものとしての宗教に直接吾人を導かないまでも、其の近くへ吾人を導びいて行くものである。

又人間は現代文明の與ふるよりも多くの愛情と團結心とが人類間に存せん事を要求するものである。それが又人を宗教に逐ひ入れつゝあるのである。基督教は獨り愛をして宗教の核心たらしめしのみならず、亦神の王國から出發して内面的なる人的團結を造り、精神的基礎上に一組織を作り上げたのであつた。然るに現代にとりては（現代が其の行く方へ行つて居る間は）他の目的が前面に表はれた。現代の第一に心掛くるは個人であつた。個人が一切の障礙から解脱せん事であつた。其の一切の能力を發揮せんことであつた。其の能力を無限に擴大せん事であつた。人生の全ての方面に於いて、個性の獨立的發達といふことが現代世界の主要特色を構成して居る。先進文明國は各々それ〴〵に此の點に關しての貢献をした。即ち藝術文學宗教又は政治的生活及び社會的生活に於いて、それ〴〵に高い水準に達した。そして其の達せし程度に比例して、各此の貢献をして居るのである。扨て一時の間は此の個人主義は舊るい理想と衝突も起さなかつた。何となれば、個性は精神界の綜合全量が自己の中に表はれて居ることを發見した。隨つて各人は各自相當の地位に於いて、各自の主要任務を盡くすことが出來た。即ち此の内面世界に各自の特殊の形式を印刻せんこと、又これを各自特有の奉仕とせんことを其の主要任務と爲すを得たからである。然るに其の精神世界が衰へて消え失せるや否や、形勢は一變した。即ちその消滅と共

に、今まで個人々々を內面的に結合し、彼等の魂を共に結びつけて居たすべての物も消滅して了つた。甲の個人は乙に對し內面的に無關心となつた。斯くて各個人は各自の進歩と極端に利己的なる利益とを自己の最高目的とし、他の何人に對しても一切無關心となつて差支ない事となつた。

個人的行爲を支配する此の原則は、社會的團體及び全國民にも擴充された。利己は行爲の唯一法則となつた。人類の道德的連帶は弛緩し分散した。危險は目前に迫つた。即ち結局 bellum omnium contra omnes（全に對する全の戰ひ）に終りはせぬかとの危險があつた。その結果として起つた反目と爭鬪とが、却つて偉大なる成業を爲し遂げたことは事實である。又これが爲に人生は十分に覺醒され、今や一人も安閑として休んで居るものは無く成つた。且つ此の新基礎の上にも人と人とを結合すべき力は全く缺けては居なかつた。仕事の如きは特に此力の一例であつた。即ち仕事は發達して大なる結びつきを爲すときは、組織團結が完全となり、其各成人には各一定の役割が出來、全體の成員を堅く結びつける事が出來るものである。然るに斯く仕事を結び付けることは、假令いくらやつて見ても、終に感情の調和に達することは斷じてないものである。若し其れが出來たら、社會的問題と今日の經濟的衝突との間の撞着は起らないであらう。その實、仕事の結合といふ事は、信念と意見との大なる相違をも、將た又人々相互の憎厭と爭鬪とをも、防止するものではない。宗派及び黨派は漸次增加する。共通の評價及び理想は吾人の社會に段々無くなつて行く。吾人は相互を理解することが益々減つて行き、次第に「バベル」の塔の故事にある如く、人々相互の言ふことがお互に分からなく成つて了はうとして居る。現代特有の人的統一の一形式たる有志者の結合、即ち多くの個性の自由の團結の如きすら、氣質に於いて人を統一すると謂はんより寧ろ事業に於いて人を統一するものと謂つた方が好い。隨つて寧ろ人と人とを內面的でなく外面的に結合するものと稱すべきである。例へば、現時の如き大混亂の中にも、安定せる結合を要求するの念慮が漸次有力に固執されつゝある。即ち共同福利の爲をも個人の爲をも計らうとする各種の結合のことである。然るに若し此の要求

が全然不可見世界のみに根柢し、不可見的のことは一切否定する事となれば、必然の結果として激しい壓迫と強制との形式を採らざるを得ない。何となればさういふ結合が効果を奏するのは、確信からではなく力からばかりである爲である。現的の社會民主黨的運動に於いては、斯かる危險が既に十分明瞭に表はれて居る。然るに現代人が極力この强制力に抵抗して鬪つて居る一方に於いて、吾人は此の紛糾錯雜から脱するの道を求めなくてはならぬが、それには、內面的なる人的結束を回復し、萬人に共通なる內面世界即ち證信と信仰と理想との世界に向つて救濟の道を求めるより外はない。吾人は人類を內部から造りあげる必要がある。而して其れを爲すには深く生を深める外に道はない。そして又それをするには宗教に須たなくてはならぬ。

今日は外面的接觸は日々殖えて行くが、內面的には吾人は益々遠く相隔たり、必然の結果として內面的孤立の情態に立至らんとしつゝある。人はかゝる尨大なる運轉機關の中にありて他人に賴ることと能はず各自の分別に訴へて何事も決めるより外はなく、人々お互に全く無關心の情態を呈して居る。斯かる孤立は苦痛である。然り、誠に耐へ難いものである。精美なる性質を有する人にとりては特に然りである。人間の活動が十分に發揮せらることは、大いに賞揚すべき事ではあるが、內面的統一及び本質的愛情の缺陷を償ふことは出來ない。卽ち個人が各自に特殊の利害の世界に割據せんとする傾向と、利己主義の重視せらるゝ傾向と、此の二つの傾きを矯めるべき釣り合ひの分銅として、十分に重も味のあるものが今は一つも無いのである。然るに全ての個人を全てから引離す此の利己主義は、個性その人にとりてすらも狹隘に過ぎる。是に於いてか、吾人の魂をより廣く調和し、各個性自身をすら超越する如き價値を各個性の爲に見出し與へたいとの欲求が必然起つて來ないわけに行かぬ。然るに自然は無情冷淡であつて人間のやることは腐敗して居る。斯かる事情に抵抗して此の欲求が勝利を得んことは、愛の王國、愛の世界が人間に臨んで來て人間に價値を與へるでなくては不可能である。然るに之れぞ正に宗教が代表せる世界である。宗教が昔人間に將來せし世界である。

魂と永遠と愛と、――此の三つは吾人の周圍の世界が手ばしこく又苦痛なく吾人に與へるものではない。之れを實現するには、先づ内面的の向上が必要である。新世界が必要である。此等の個人的側面を超越して人性の全量は種々の疑念を覺醒し、又種々の改造を必要ならしめたのである。人間は經驗が人に示す如きものであると認めてはならぬ。人間には完全なる改造、即ち内面的の生まれ更りが必要である、――といふのが宗教の大眼目、特に基督教の大主旨であつた。現代は人間といふものを信ずる事が多く、人間に自己の弱點を意識せしむるよりも、自己の力を意識せしむる事の方が多く、人間に對し其中に眠むれる諸能力全部を十分に發揮せよと呼ばはるのであつた。又實際、人間は今まで人から信ぜられて居たよりも多くの事を爲し得るものであると云ふ事、又人間は能動的に世界に手を加へる事が出來る。そして着々と合理的を現實化し、現實を合理化する事に努力し奏効し得るものであると云ふことが證明された。然るに過去の時代にありては、人間は自己を高く評價し、高大な事業を大膽に引受けもしたが、然し自分の繼承せし精神的結合の中に

依然として生活せる自己を意識し、自己は神の王國の一員である。又は理性の世界の一員であると感じて居た。そして此の意識が彼れの能力を鍛錬し又擴大した。然るに此種の結合は、漸次消滅した。人間へ人間へと傾いて行つた傾向は、次第に墮落して、超人間界に對する粗笨なる反對運動となり、宗教に對し、又すべて不可見の世界に對する反抗的態度を取ることが漸次增加するに至つた。此間の消息をよく表はしたのは「ルードヰヒ・フォイエルバッハ」の有名な言葉である。曰、『神は吾が最初、理性は吾が第二、人間は吾が第三の而も最後の思念であつた』と。人間に關する斯かる概念（これは人間を彼れ自身のみに限るものである）と對照せらるゝは「ヘーゲル」が其『歴史哲學』中に言つて居る言葉である。之れにも眞理が含まつて居る。「人間を最高位に置くときは、人間が自己を少しも貴ばぬといふ結果になる。人間よりも高い存在物があるといふ意識ありてこそ、人は自己の眞價を認め得る如き立脚地に到達するものである」と。

爰に否定す可からざる事實がある。不可見の世界との連合を一切斷絶し、眼を全然可見

界にのみ限つた結果として、人間が漸次小さくなつたと言ふ事である。第一これが爲に人間の占むる實在の全量中の位置が下がつた。彼は今や自然中の單なる一片である。隨つて高い位置や特殊の仕事に對し之れは己れのものだと要求するの權利が無くなつた。近代の自然研究により時間空間が非常に廣大なるものと成つたとは正反對で、人間の全領域は段段縮んで小さいものに成つた。「ウィリヤム・ゼームズ」が、過去一百五十年間の進歩は畢竟物質界の連續的に擴大し、人間の價値の見る〳〵減じて行つたことを意味するだけに過ぎないと言ふ事實を力說したのは正當であつた。

獨り人間の外面的位置が小さく成つたばかりでなく、人間は內面的にも退歩した。人間が感覺的存在にのみ限られて居る時は、人間は大いに自己の精神的水準を向上し、自己の中の小さい卑しい自己中心的な部分を制覇しようとする一切の動機及び一切の資格を失つてしまふ。彼れは自己中に發見するまゝのものを甘受せねばならぬ。而して自然が彼れの中に覺醒せし衝動のみに專ら從はねばならぬ。之れに抵抗するなどゝは以ての外だと思はれるのも必然の結果である。それも樂天的な見地により人間が得意に成つて居る間は、そして自分といふものが自分の眼に偉らくも見え品位ある如くにも見える間は我慢も出來やうが、今少しく正直な考へ方をして、單なる自然的存在物として認められたる如き人間が微力にして缺陷あることを發見し、又認めるやうに成るや否や、吾人は最早我慢も出來なくなる。現代生活の經驗が、此の人間微小觀の方を甚しく偏重して居ることは、否定し難い事實である。第十八世紀は人間の品位と偉大さ(ラ・グランデュール・ドゥ・ロンム)を高潮することに十分盡力することが出來なかつたが、今日の吾人は人間といふものを想像するとき、吾人は微小卑下にして自己中心的なる『餘りに人的なるもの』(ニーッツェー)を聯想する傾向が多い。吾人は斯の如く人間の卑しいことを承認するまでには、一種の煩悶がある。隨つて現代人は人間を彼れ自身の領域に於いて自分の前から向上せしめんとする熱心なる努力を現に生じつゝあるのである。此の手段としては、個性を結合して大きな團結を作り、此の團結をもつて理性を分有せるものと認めるに限る(これは「アリストテレース」が群集

に於ける理性の蓄積といふ說を立てたのに一致するものである）との希望を懷く論者もある。斯かる論者は群集の理性なるものを深く信じて居るのである。之れとは正反對に又或る論者は、個々の優秀なる個性を成る可く群集以上に賞揚し、之れをして知的方面の創造の中心たらしめんとする。斯くて前者は集合により、後者は分立により、各々人間を今少しく偉らいものにすることが出來るといふ希望を懷いて居る。然し此等の傾向が如何にそれ相當の理由あるにせよ、兩つながら主要の目標には達して居ないのである。蓋し、若し人の性が、內部より向上し得ないものとせば、卽ち人間は、單なる自然的存在物であるとせば、いくら人間界內で調節をし直して見たところで、到底人間は偉らくなるものではない。そこで現代人は不相變單なる人的の敎化及び文明へと驀ぐらに進んで行く、現代人は敎化文明の不滿足なのを看破する。然も未だ其れから脫却する事も出來ず、又それ以上に超越する事も出來ない。現代人は新らしい目的を發起する事も出來ず、將た敎化文明の供給する力以外の新らしい力を發展せしめる事も出來ずに居る。然るに、今日熱心なる仕事と不休の運動とが澤山に行はれて居るに拘はらず、此の仕事に必要な目的、――卽ち仕事そのものを高尙にし、又鼓吹する如き目的――の滿足なものが一つも無いと言ふ事實は、今日の文明の現情をして絕對的に吾人の耐へられないものとする所以の事實である。人間は多くの妨礙及び傷害を受けても勇氣を失はずして我慢し得るものであるが、自己の全生涯が無目的また無意義となるのは我慢の出來ないものである。吾人の生活が益々きづい又愈々骨の折れるものと成りつゝあればこそ、吾人は吾人の生活が目的と意義とのあるものにし度いといふ要求を無條件に提出せざるを得ないのである。

故に今日苟くも深みのある魂を有する人たちは、人性を內面的に向上させんこと、新らしい理想主義を樹立せんことを要求して居るのである。而して此の要求は必然的に宗敎との提携を必要するに至るものである。宗敎が今後如何に多くの反對に出會はさうとも、一切の反對者よりも、否な一切の知的困難よりも、更に有力なるは全人類及び個人の精神的自己保存の必要であらう。自己保存が出來なくて滅亡せんとするの憂ひあるに對し、極力

豫防を講ずる其の努力の中からこそ、原始的の力は生まれ出るものである。——而して此の力は世にも最も有力なものである。

斯んなわけで、惡戰苦鬪と根本的の大騷動とを伴ふには相違ないが（歷史は間接に之を證明する傾向がある）宗教が新に擡頭するに至らんことは確かである。然宗教に立還るといふ事は、決して古るい形式の宗教に還へることの意味ではない。近代文化により生活條件は既に舊生活と比し甚しく一變したものに成つて居る。隨つて吾人は舊形式の宗教を其まゝに復活するわけには行かない。宗教が其の本原の源頭に立戻ることに奮勵すればするほど、又宗教が其れ自身の領域内に於いて現世的一時的のものと永遠的のものとを區別すればするほど、そして其の永遠的のものを新らしい能率あるものとし、現在の實際の必要に對し、密接且つ有効なる關係を有せしむるに至れば至るほど、宗教は人の魂を取り戻すことが一層速かに成るであらう。永遠性が優ぐれて居るといふ事は、其が時間内に變化せずして存續するといふ意味からではなく、一切の時間の中に自己を失ふことなく一切の時間に這入りこみ得るといふ點である。そして一切の時間から各時間の努力が把握せる特殊の眞理を抽き出して來ることが出來るといふ點である。『老いざる舊をしつかり握らうとする人は、老いる舊を手放さねばならぬ。』（ルネベルグ）

今日人類の根本的氣分は、近代の始めとは根本的に正反對である。近代の初にありては、新しい生活力が旺盛であつた爲め、全ての實在に對し薔薇色（壯健の色）の着色を施した。而して包有的の文化が全ての個人の精神的必要を完全に滿足させることも希望し得られない事もなかつた。然るに此の時代の經驗は人間の力の限りあることを證明した。複雜なる幾多の大問題が發生した。多くの不合理が吾人の環境の中にある事が明白となつた。人間の大望は彌々大なる障礙に逢着した。然るに吾人の世界に幾多の不合理の存在することを認むる結果として、人は左の二つの途の中何れか一つを選ばねばならぬ。即ち自分自身を不合理に對しては無力だと言明するか、又は男らしく戰ふかである。若し前者の途を擇ぶならば、人生一切の勇氣と力とは潰えて了つて人は悲觀厭世の主義に降服する事になる、又

若し男らしく戰ふならば、人は不可見の世界との關係を結び、實在の深みに達し、此處から新しい生の力を引出し、新たに勇氣を鼓し、一切の不可見に對して戰ふことが出來る。其の勇氣こそは基礎の確かな且つ眞面目な樂天觀を結果するものである。斯かる樂天觀は市場の皮相的な樂天觀とは根本的に異なれるものである。虛僞の樂天觀は複雜紛糾の問題と不可見界とを無視し、隨つて全ての生の深みを失ふものである。之れに反して樂天觀は此等を認めるが此等の爲に畏縮したり阻止されたりする事がない。此の樂天觀は如何なる妨害に出會はしても、其の妨害よりも以上の力を有するものである。そして反對があつて益々新らしい力と勇氣とを獲得するものである。余は斯かる眞正にして根柢ある樂天主義が米國民の內面的性質と一致せるものと考へたい。（註――これは「パーパード」大學に向つて講じたる論文である。）然し宗教なくんば眞正の樂天主義は不可能である。

大正十四年十二月七日印刷
大正十四年十二月十七日發行
（定價壹圓貳拾錢）

譯述者　高橋正熊
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込八八八〇番　八〇〇〇番　六七八九番
振替（東京）一七四二番

◀社會生活と精神生活▶

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社
電話小石川五九二一番
印刷者　佐々木俊一

◇新學說大系◇

第一編 唯物史觀の改造 ツガン・バラノヴスキイ 高島素之氏譯述
第二編 社會學的認識論 ラッツエンホーファー 宮崎市八氏譯述
第三編 時間と自由意志 ベルグソン 北昤吉氏譯述
第四編 田園・工場・仕事場 クロポトキン 中山啓氏譯述
第五編 アダムスミス富國論 アダム・スミス 神永文三氏譯述
第六編 社會生活と精神生活 オイツケン 高橋正熊氏譯述
第七編 政黨心理の研究 ロベルト・ミヘルス 西村二郎氏譯述
第八編 社會學通俗教科書 ギッディングス 神永文三氏譯述

◇新學說大系◇

第九編 マルクス經濟學入門 カール・カウツキー 石川準十郎氏譯述
第十編 社會學思想の人生的價値 アルビヴン・ウエスモール 高島素之氏譯述
第十一編 プラトーン理想國 プラトー 津久井龍雄氏譯述
第十二編 財産の進化 ポール・ラファルグ 高島素之氏譯述

續刊

倫理學解說 カント 井上篤氏譯述
本能と社會 ウキリアム・マリドーガル 宮崎市八氏譯述
遺傳法則論 グレゴール・メンデル 木村學氏譯述
政治學講義 トライチケ 白石一氏譯述

レスター・エフ・ウオード著　石川功氏譯

■純正社會學

全二卷　上卷　四六判最上製　總紙數七百頁
發賣　價參圓五拾錢　郵送料拾八錢

近年、社會學的興味は一般に著しく熾になつて來たにも拘らず、その根本をなす學としての社會哲學、即ち我々が現在その中に生きてゐる社會そのものゝ本態、その發生や進化や作因や能力などの原則に關する知識の、甚だ乏しいことは何人の眼にも明かな所であるが、根本的な社會學的知識なくして、社會運動を論じ人生を語り思想を說くのは、砂上に樓閣を築くの亞流と云はなければならぬ。その意味に於いて本書の出版は、萬人の渴を醫すに足るものであることを確く信ずる。本書の「社會學に於ける聖典的地位は、今更說くまでもあるまい。偉大なる生物學者で且つ近代心理學的社會哲學の始祖である原著者が、その全思索體系の結晶として數ヶ年に亙つて大成せしめた畢生の名著で、上述したやうな社會學の純正理論的方面の代表的論述である。しかも行文あく迄も平易、深遠なる學理を興味と驚嘆のうちに我れ〳〵のものとさせる。譯また極めて流暢、何人にも一氣に讀了するを得せしめること、眞に、尋常譯書の比でない。近來稀有の良書として特筆する所以である。

■文化と人生とに對する基礎的知識■

高畠素之氏譯　第一卷（新刊出來）

マルクス資本論

全三冊

▼菊大判千百餘頁
▼總洋布最上製函入
▼定價金八圓五拾錢
▼書留送料參拾六錢

■全然舊版の面目を一變せる改譯■ 舊版は全部六拾圓なるが、改譯本は約三分の一にて發賣する見込み

マルクスの『資本論』は、有史以來、人類の科學的努力が產出した最大勞作の一つである。マルクスは其該博なる知識と、深刻なる論理のメスとを以つて、資本主義經濟の構造を餘蘊なく解剖し盡くし、次いで來たるべき新社會の曙光を暗示した。而して世界は今や、この科學的巨人の指示に從つて、悲壯なる改造を、遂げんとしてゐる。刊行六十年にして、時代の生命を現實的に燒熱し、時代の思潮を樞軸的に囘轉せしむるもの、マルクスの『資本論』の如きは稀である。而も『資本論』は論旨深遠にして行文難解を以つて聞え、これを眞に理解せんとすれば、豐富なる原語の素養に加ふるに、克明なる思想の鍛錬を以つてしなければならない。譯者はマルクスの研究に於いて良心的權威に叩頭する所の第一人、曩に滿六ヶ年の全身的沒頭を以つて譯了したる『資本論』全三卷一萬枚は、譯者にとつて寧ろ悲痛の追憶を存するのみ。震災のため舊版紙型全部燒失せるを寧ろ好機とし、舊版の雜澁なる筆致は科學的嚴正を傷けざる限り、玆に全部理解し易き日本文に書き改められた。難解の外國文を轉じて、醜譯臭味なき邦文の『資本論』を完成したる譯者の勞は永久に記念せらるべきものであると確信する。

高畠素之氏著

社會問題辭典

（第六版出來）

全一冊　菊版總洋布紙數八百頁　定價五圓　郵送料二十四錢

現代の學問智識の中軸たる社會問題改造思想に關する常識の指針たる可く編まれたのが本辭典である。老幼を問はず男女を論ぜず、職の甲乙に係らず、文藝家にも政治家にも、資本家にも勞働者にも、主婦にも學生にも、あらゆる人々の爲に、此の種の常識の、最も簡便にして最も平易、最も深切にして最も周到なる提供者としての任務を以て本書は出でた。方今新聞雜誌に現はるゝ各種の論說は、此書に鍵を得てその意味を了す可く、これを系統的學究的に學ぶの餘裕無き人も、疑ひと共に此書を繙いて、おのづから大體に通ずる事か出來るであらう。夙に出づ可くして、出でなかつた此の辭典は　斯界の權威者たる高畠素之氏が、五箇年苦心の結果として漸く世に公けにさるゝに至つた。社會問題改造思想のあらゆる部面に亘つて、語を集むること數千、集めて說かざるなく、說いて悉さざるなく、時に一語の解說に十數枚を費せるものも少くない。此書の一卷は　實に近來頻出する社會問題改造思想の講說書の幾十百卷の內容を藏してゐるのである。

改造新語辭典

相田隆太郎氏編　三五版總洋布特製　定價壹圓送料六錢

生田長江氏譯

ニイチエ全集

- 第一編　人間的な餘りに人間的な（上）　定價貳圓五拾錢　送料拾八錢
- 第二編　人間的な餘りに人間的な（下）　同
- 第三編　黎明　同
- 第四編　悅ばしき智識　同
- 第五編　ツァラトウストラ　定價貳圓八拾錢　送料拾八錢
- 第六編　善惡の彼岸・道德系譜學　同
- 第七編　權力への意志（上）　定價貳圓五拾錢　送料拾六錢

ツァラツストラ解釋

並に批評　阿部次郎氏著

——定價壹圓貳拾錢、郵送料八錢——

□新潮社出版□

思想・文藝講話叢書

■第一編	近代思想十六講	中澤臨川氏 生田長江氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第二編	社會問題十二講	生田長江氏 本間久雄氏 著	價貳圓 郵送料拾貳錢
■第三編	近代文藝十二講	生田長江氏 森田草平氏 野上臼川氏 昇曙夢氏 著	價貳圓參拾錢 郵送料拾貳錢
■第四編	近代劇十二講	楠山正雄氏 著	價參圓五拾錢 郵送料拾八錢
■第五編	改造思想十二講	宮島新三郎氏 相田隆太郎氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第六編	日本近世文學十二講	高須芳次郎氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第七編	日本現代文學十二講	高須芳次郎氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第八編	小說研究十六講	木村毅氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第九編	婦人問題十六講	與謝野晶子氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第十編	社會學十二講	杉山榮氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第十一編	東洋思想十六講	高須芳次郎氏 著	價貳圓五拾錢 郵送料拾貳錢
■第十二編	近世歐洲繪畫十二講	伊達俊光氏 著	價參圓五拾錢 郵送料拾八錢

527
68

227773
Kojima

終